

報告

北海道スタンダード研究委員会

日本そして北海道のあり方と役割 ～山田吉彦教授を第 22 回勉強会にお招きして～

正 岡 久 明

1. はじめに

勉強会講師として、東海大学海洋学部教授であり静岡キャンパス長(学長補佐)を務められている山田吉彦様(博士(経済学))をオンラインでお招きして、表記の勉強会を実施しました。



山田吉彦教授(オンライン講演)

山田先生は「海と経済」の第一人者であり、海を経済・政策・外交・環境・資源・エネルギー・安全保障などの観点から横断的に研究されています。

勉強会では「日本そして北海道のあり方と役割」を主題として、第一部では「海からみた領土問題(北方領土問題を含む)」について、第二部では「海を守る日本」について講演をいただきました。

また勉強会のテキストとして、山田先生の著書「完全図解 海から見た世界経済(ダイヤモンド社)」を使用させていただきました。

○日時 : 令和 2 年 12 月 4 日 18:00 ~ 20:30

○会場 : TKP 札幌駅カンファレンスセンター



会場の様子

○形態 : 会場参加型とオンライン(Zoom ウェビナー)参加型のハイブリッド形態

○参加者: 22 名(会場 14 名・オンライン 8 名)

2. 講演概要

講演ではデータや写真などを用いて、具体的でわかりやすい説明をいただきました。

山田先生の講演内容は、機微に触れセンシティブな内容を多く含むため、すべての講演内容を詳細に述べられないことをご容赦ください。本誌では講演をいただいた多くのテーマの中から特に「北方領土問題」「海に開かれた日本」「尖閣諸島を取巻く現状」を取りあげて、山田先生の本質的なメッセージと質疑応答での回答を中心に紹介します。

1) 講演

■北方領土問題

山田先生は北方領土にビザなし交流で 7 回も、安全保障・地域開発・後継者育成などの目的で行かれているということです。日本のなかで最も多く北方領土を訪れている研究者だと推察します。

講演では、北方領土にある歯舞群島・国後島・択捉島・色丹島はそれぞれ性格が異なることや、ロシアの戦略が有効に機能してしまっている現状と課題を具体的に挙げられたうえで、北方領土問題の解決に向けた方策を示されました。

地球温暖化の影響を受けて新航路として近年注目されている北極海航路は、太平洋に面した日本の港、なかでも北海道の港(苫小牧や釧路など)がアジアのハブ港となり得る潜在性に加え、北海道経済に大きく波及するポテンシャルを有し、北方領土問題の進展にもつながる可能性を示唆されました。

日本の近海は、中国・韓国・ロシアの経済にとって非常に重要なシーレーンであり、この海域や海峡を守ることが日本にとってもアジアにとっても肝要である。そのためには日本の島々をしっかり守ることが重要である。

東海大学静岡キャンパス長(学長補佐), 海洋学部 教授 山田吉彦

■海に開かれた日本

山田先生が東海大学海洋学部教授に就かれる前、日本財団に勤められていた時は、海洋安全・造船技術振興・海洋環境保全などの事業を統括されるなど幅広い経験を有されています。

講演では、日本の南北東西の長さはそれぞれ3千km以上あること、無人の島々に将来的な可能性が多くあること、領海と排他的経済水域を合わせて447万km²の面積を有することなどを挙げて、日本は島が多く海に開かれた国であり、魅力的な国であることを示されました。

日本の排他的経済水域には、エネルギー・鉱物・魚などの資源が豊富にある。かつてのように他国に求めなくても、いざとなったら自前のエネルギーや鉱物資源を使うことができる豊かな国である。

東海大学静岡キャンパス長(学長補佐), 海洋学部 教授 山田吉彦

■尖閣諸島を取巻く現状

山田先生は石原都知事の時に、東京都専門委員(尖閣諸島担当)に就かれていました。

戦前、尖閣諸島の魚釣島にはかつお節工場があって99世帯248人が住んでおり、1940年に島民が避難したものの、1972年日本に返還された経緯を持つまぎれもない日本の島です。本来領土問題すら存在しないはずが、近年、中国が三戦(世論戦・心理戦・法律戦)を使って圧力をかけ続けてきている実態について詳しい説明をいただきました。

日本の島々を守るためには海上保安庁・防衛省・外務省が一体となって対応していかないと領土を守りきれない。縦割りの弊害に横串をさしていく研究を我々が進めていくことが大切である。

日本の周辺の海を守るということはアジアの安定につながり、世界の安定にもつながる。

日本は海洋国家として世界へつながる海の道を守っていく役割があると考えている。日本の海をしっかり守ることで、日本やアジアの未来は明るいものとなる。

東海大学静岡キャンパス長(学長補佐), 海洋学部 教授 山田吉彦

2) 質疑応答

質疑応答で会場からいただいた質問に対する山田先生の回答について紹介いたします(オンライン参加の方からの質問はチャットで受け付けました)。

■北方領土問題について

質問：基本的にロシアの情勢が安定しているなかで返還が実現する可能性はあるのでしょうか。

北方領土問題の進展を考える時、北方四島における共同経済活動として、観光・風力発電・海産物の養殖・温室野菜栽培・ゴミの減容対策などが挙げられる。これらは諸々の現実を勘案すると容易ではないかもしれないが、それでも様々な経済交流を通じて日本とロシアの結びつきを強くすることが返還へのアプローチであり、最優先課題である。

東海大学静岡キャンパス長(学長補佐), 海洋学部 教授 山田吉彦

■サプライチェーンについて

質問：今回のコロナ禍のこともあってサプライチェーンは国内で確保することが大切だという議論があるなか、海洋資源に恵まれている日本において、国策として資源開発に取り組むことはできないのでしょうか。

資源を外国から買っていた方が安い現状では、開発や投資をする企業がなかなか出てこない。資源開発は日本の将来に関わる問題でもあり、国策としてある程度の投資をすることが大切である。研究開発の拠点は地方の活性化のためにも各地域に分散させて、政府はそこに投資していくべきだと考えている。

東海大学静岡キャンパス長(学長補佐), 海洋学部 教授 山田吉彦

■尖閣諸島について

質問：尖閣諸島で施政権を行使する方法として、どのような方法があり得るのでしょうか。

日本の気象や海象を調べる上で尖閣諸島周辺の海洋調査は非常に有効である。そして尖閣諸島は貴重な自然が残る場所である。海洋環境を守る島として日本人だけでなく欧米からも野鳥や海洋など世界の研究者を招いて、将来的には国際的な研究機関を魚釣島に置くという方法も考えられる。もしそこに他国が侵略してくることがあれば世界を敵にまわすことになる。尖閣諸島は先ず、世界が認めてくれる環境づくりを目指すべきであり、世界を巻き込むような戦略が重要だと考える。

東海大学静岡キャンパス長(学長補佐)、海洋学部 教授 山田吉彦

3. 教材「海から見た世界経済」山田吉彦著

勉強会でテキストとして用いた山田先生の著書「海から見た世界経済」を紹介します。

日本の貿易は99.7%が“海”で行われていて、“海”を知ることで世の中の仕組みや経済がより深くわかる知的教養書です。また本書は経済にとどまらず、世界の歴史や秩序・文化・宗教などの成立ちに加え国家戦略までもがとてもわかりやすく書かれており、国家観や大局観を養うための必携本と言えます。

本の表題にある通り“海”に視点を置くことで本質が見えてくることに、目から鱗が落ちました。



海から見た世界経済(ダイヤモンド社)

4. 参加者の声

勉強会の直後に実施した参加者へのアンケートでいただいた生の声を紹介します。参加者の声を一読すると、山田先生が講演で伝えられた並々ならぬ熱量を感じとることができると思います。

・これまで北方領土の返還運動をニュースや文献で見ていましたが、「海洋」という視点からの返還の問題点や課題を講演してくださり、私自身にとって新たな視点を得ることができました。また山田先生が私のような専門外の人間でも理解しやすいように話をしてくださり、大変わかりやすかったです。さらに講演の内容が北海道から世界へ飛び出していくワクワク感も味わうことができ、大変有意義な時間を過ごさせていただきました。

・山田先生の実体験に基づく、豊富な情報で大変勉強になりました。日本が海に囲まれていることを認識してはいましたが、中国大陸に蓋をするように配置されている地図を見て中国の海洋政策やロシアの北方領土に対する考え方の理解も深まり、返還の難しさの理由も少し理解できました。また北極海航路の地図や説明も勉強になりました。温暖化による北極の氷が本当に大幅に減少していることもリアルに理解でき、本当に良い勉強会だったと思います。ありがとうございました。

・今回の山田先生のご講演は広い視点のお話で示唆に富む内容が多かったです。視野が広がりました。技術士は技術に限定することなく、広い知識や知見を持っていることが大切だと考えています。

・講演内容が大変勉強になり、日本の行政や政治家は何をを考えているのかと思って聞いていました。このような講演を我々技術士だけではなく、多くの一般の道民に周知していくことも必要ではないかと思いました。また技術士会としても、海洋資源や防衛・生命安全などに至る技術と人材の育成に貢献できる体制を考えていくことも必要だと思いました。

・陸をフィールドとすることが多い仕事柄、普段あまり接点のない内容であり総体的に興味深く講義を受けることができました。特に領土問題に関して「島」を守ることの重要性や、日本の「海峡」の重要性を東アジア地勢図から認識することができました。さらに地球温暖化による北極圏の氷の減少から航路開発の覇権争いへと繋がることも興味を持ちました。ありがとうございます。

・北方領土や尖閣諸島、日本の歴史、各国の戦略的位置づけ、日本近海の海洋資源などとそのポテンシャル、経済上・防衛上の島の重要性など、いずれも具体的で大変勉強になりました。またそうした内容にも感銘を受けましたが、私は山田先生が海洋に向き合っている姿勢に感動いたしました。会場からの多くの質問に対して、山田先生が答えられている内容を鑑みると、先生が海洋を通じてどれだけ多くの課題に向き合い、その解決に現実に取り組んでこられたのか、そして海洋の持つポテンシャルを日本の発展に活かすために様々な手立てを使ってご苦労されてこられたのかが、お話の中ににじみ出ていてとても素晴らしいと思いました。

今回は当会の設立趣旨に合わせて、北方領土問題に多くの時間を使っていたいただきましたが、例えば海洋を通じて“世界から見た日本”などについてのお話もっとお聞きしたいので、またご講演の機会を設けさせていただければありがたいです。その際にはぜひ来道していただき、講演会後の懇親会では北海道の食を堪能していただきつつ、本音の話などを議論できることを楽しみにしていますので、何卒よろしくお願いいたします。

(北海道スタンダード研究委員会 代表 天沼宇雄)

5. 勉強会を終えて

第22回勉強会に山田先生をお招きした思いをご紹介します。

これまで北海道スタンダード研究会は道内に焦点をあてて、北海道の歴史・文化・観光・食などの観点で議論を重ねてきたところです。

今回は別な角度から北海道を見つめるために、くわえて私たちの視野を広げるために、大きなテーマ「日本そして北海道のあり方と役割」を掲げて、山田先生にご講演をお願いしたところ、趣旨にご賛同いただきご快諾をいただきました。山田先生には、この場をお借りして感謝とお礼を申し上げます。

山田先生の講演の視座は予想を遥かに上回るもので、北海道のみならず日本の枠組みをも一気に飛び越え、世界の地政学や戦略に関することにも及び、私たちにしっかりとした大きな定見を与えてくださいました。

日本の海を拓き、守ってこられた先人に感謝の念が尽きません。今この時も、最前線で領海を守っているのは海上保安庁の精鋭であり、後方にあるのは有形無形で支えているのは政府・政治家・自治体・研究者・技術者などですが、とりわけ国民一人ひとりの「日本の領土・領海を守る」という意識こそが、最終の後ろ盾になるという思いを新たにしました。

6. 今後に向けて～島国根性を発揮して～

「島国根性」を辞書で引くと「視野が狭く、閉鎖的でこせこせした性格」とあります。他方、「海から見た世界経済」から引用すると、「島国根性の本来の意味は、逆境を乗り越え前に進む不屈の精神、チャレンジ精神」ということで、山田先生は「今こそ日本人は島国根性を持て！」と力づけています。

フロンティア精神を有する北海道人は、人一倍「島国根性」を発揮する可能性を有していると言え、この言葉を大切にしていきたいと考えています。

山田先生の講演全体に通底する「日本のポテンシャルは高い」「日本には未来がある」というメッセージに感銘を受け、「北海道への期待とエール」に心が熱くなり、これからの研究会活動に対して大きな力を頂きました。

正岡 久明 (まさおか ひさあき)

技術士(建設/総合技術監理部門)

北海道スタンダード研究委員会 副代表
株式会社 シー・イー・サービス
e-mail: masaoaka.h@ces.co.jp

